

# ウサギの飼養管理基準

## はじめに

本基準の目的は、「動物の愛護及び管理に関する法律」及び「動物飼養管理ガイドライン」を遵守するのを助ける実質的な指針となることである。飼い主は、常に所有及び占有する動物の生理・生態・習性を理解し、動物の福祉を満たす義務と責任がある。

## ウサギってどんな動物？

現在、家ウサギとして飼育されているウサギの祖先はヨーロッパアナウサギです。日本古来の野ウサギとは異なる習性を持っています。もともと、穴で生活し、被捕食動物であるため、安心して身を隠せる休息場所が必要です。

○平均寿命：6～7 歳。飼い方にもよるところが多く短命と言われていた以前と比べ完全室内外では 10 歳を超えることも決して稀ではありません

○草食性：野菜、牧草等々を食しますが市販のペレット状のラビットフードが多く使われています。炭水化物をうまく消化できないためイモ類等は避けましょう。また、水分の多いレタス等の野菜は下痢の原因になりますので与えすぎに注意しましょう。パンやビスケット状のものを与える人もいますがそれらの食品の中には動物性油脂や卵などウサギが自然の中では決して口にしないものが入っているので避けるべきでしょう。

○水分はとても大切です

ウサギは多飲多尿の動物であり水をよく飲みます。新鮮で切れな水を常時飲めるようにしておきましょう。

○体重：1～8 kg（品種や性別によって異なる）

○繁殖能力：発情期は周年で繁殖力の高い動物です。メスのウサギは多ければ一年で 10 回も繁殖をすることが可能です。言い換えれば繁殖できる環境に置けばメスは常時子を生みつづけるということになります。捕食される側にいる動物としては種の存続を保証する自然の姿です。

○マーキング：未去勢のオスは猫と同様縄張りを主張するために尿をスプレーする行動を展開させます。

○離乳時期：5～6 週齢

母ウサギから独り立ちする年齢は 8 週齢以降といわれています。

○社会化期：3～4 週齢までであるが、もっと長く続きこともあります。

○きれい好き：ウサギは自分で被毛をなめて体をきれいにします。高齢、肥満などが原因でこれができなくなると後半身の汚れや涙が他の動物と比べ少ないために目やになどが目立つようになり飼育者が補助をする必要が出て来ます。

#### ○遊び

ウサギは常時体重や骨格を健全に維持するために動き回る必要があります。走る、飛び跳ねる、立ち上がる等々の動きが必要であると同時に好奇心旺盛であるために遊びの道具を提供する必要もあります。

○感覚等：視力は近視でよくないが、光を感じる能力は高いため、暗闇に強く、聴覚は敏感で些細な音まで聞き取ることができます。嗅覚は犬並みと云われている。ヒゲが発達して暗闇でも周囲を察知することができます。

○食糞行動：未消化の植物繊維等を含んだ糞を再度食して消化と栄養の再吸収を促す行為、やや軟らかい盲腸糞を食することがあります。老廃物は硬い糞として排泄。

○歯は一生伸び続けます。

○社会性動物で2～10羽の群れで生活します。2羽では雌雄1羽づつ、大きな群れでは雌の数の方が多い。

○目立つ行動は捕食者の対象となるため、苦痛や恐怖を感じていてもごくわずかな表現しかとらず、気づかれにくい場合があります。

○顎にある分泌腺から出る匂いをこすり付け縄張りを示します。時に、人間にも行います。

○決まった排泄場所をつくります。

○知的動物であり、非常に怖がりやすい動物です。危険に対する反応は、最初固まったように動きを止め、危険が近くに迫ったときは走って逃げます。逃げ道がない場合にのみ噛むなどの闘う傾向にあります。

**ウサギの生態・習性を理解した上で、以下のウサギのニーズ（欲求）を満たしてあげましょう。**

### **1. 適切な環境**

- ・温度は約 19 – 26 度の範囲に保つことが理想
- ・ウサギは湿気に弱いので湿度は 50%前後にする
- ・捕食動物などの危険から守る対策
- ・安心して身を隠して休める場所を用意する
- ・心的ショックにて死亡することもあるため強い驚愕反応を起こすことがないように配慮する
- ・ケージに入れる場合、足を延ばして横たわることができる幅/長さがある
- ・ケージに入れる場合、最低でも「3 飛び」はできる広さ

- ・ケージに入れる場合、後肢で立ち上がる際に耳が天井に触れることがない高さ
- ・肉球がないために足の裏に負荷をかけるワイヤー/網などの床は不適切
- ・床敷きは清潔で乾燥したもので食べても安全なものとする（干し草など）
- ・トイレはウサギが全身入る大きさと縁の高さは体高の半部以下が理想的
- ・排泄物はこまめに片づけ悪臭、害虫の発生を防ぐ
- ・室内で放し飼いにする場合は電気コード、観葉植物等々の危険物にウサギが触れぬようにする
- ・ケージ、室内どちらにおいても滑る床を避ける  
（後肢に強い力をかけけりだすように動くために滑りやすい床に長時間置くと背骨などに異常が生じる）
- ・邪魔されずに安心して飲食できる場所を用意する
- ・強い日差しや温度変化から守られること
- ・十分に換気されていること
- ・大きな騒音から離れた場所であること
- ・生活環境は清潔かつ衛生的にすること。排泄物はその都度取り除くことが望ましい。
- ・床敷等を新しく交換する際は、使用済みであるが清潔な床敷を少し残しておくとうサギが安心する。

## 2. 適切な食餌・水

- ・新鮮な野菜、ウサギ用ペレット、干し草などをバランスよく与える
- ・年齢や体調に合わせて給餌を行う
- ・生ものは常に新鮮で清潔なものを与える
- ・水は給水ボトルで与える場合には頻りに洗浄をする、また皿などで与える場合には中に糞などが飛んで入る場合もあるので注意する
- ・給餌給水（干し草の入れ替え、水の入れ替え等々）は最低一日二回行う
- ・パン、クッキーなど人間の食べ物は絶対に与えない
- ・与えてはいけない野菜/果物（例：ホウレンソウ、イモ類などの炭水化物、生大豆、柑橘類等）に注意する

## 3. 正常な行動がとれること

- 本能を満足させエネルギーを発散できる遊び等を用意する
  - ・木材などの自然素材でかじられても安心なおもちゃを使う
  - ・十分にジャンプ、八の字疾走等々の自然な運動欲求を満たす空間を用意する

- ・かじる、穴を掘るなどの行動欲求を満たすための工夫をする
- ・ストレス徴候に気を付ける
  - 無気力、攻撃的、呼吸が荒い、落ち着かない、旋回運動、給水ボトル等を噛むなど
- ・非常に怖がりなため、罵声や罰を与えてはならない。

#### 4. 社会的な関わり

- ・群れで生活する動物のため、長時間一羽で過ごさせないこと
- ・社会性動物のため、理想的には別のウサギと一緒に飼育されるべきである。
  - その際不妊化処置をすることと世話できる羽数にすること。異なる体格や年齢差があるウサギ同士にしないこと。相性をしっかりと見極めること。
- ・飼育数に関わらず、十分な精神的刺激を与えたり、飼育者が十分に遊んであげること。

#### 5. 健康管理

- 一 日頃から犬の様子を観察し健康維持に努める。
- ・骨の中が空洞なため骨折しやすいために扱いは注意が必要
  - ・未避妊、未去勢の個体同士は縄張り争いで喧嘩をし互いに傷つけあうことがある
  - ・未避妊のメスは偽妊娠で気が荒くなってしまう時期もある
  - ・繁殖をしないのであれば不妊処置をする
  - ・ノミダニなどの寄生虫が付かないようにする、が犬用に用いられている一般の駆除薬はウサギに有害である
  - ・ウサギは肺が小さいために呼吸器に負担をかけないように、アンモニア臭（トイレ）やほこり（換気の悪い場所）などに気を付ける
  - ・毛玉などを吐き出すことができないために消化器官が詰まる「うっ滞」を起こしやすいので食物繊維と水分を十分に与える
  - ・被毛の手入れや爪切りなども必要である
  - ・盲腸糞を食す必要があるが肥満などで体を曲げることができなくなるとそれができなくなり問題となる
  - ・糞などの汚れが後半身にこびりついてしまうとハエなどの寄生虫がそこに卵を生みつけてしまい問題となる
  - ・歯牙の伸びすぎで不正咬合が起こり摂食に支障が出るため、定期的に動物病院などで歯切り行うこと。
  - ・前歯と爪は伸びやすいため、週一回以上はチェックすること。

## 6.その他

### 1) 飼い主責任

- ・なるべく室内飼育をすること
- ・ケージ飼いをする場合には十分な運動の機会を与えること
- ・捕食される側の動物として持ち上げられたり、拘束されたりすることに対して過剰な抵抗を示すことも多々あるので常に人間の手に慣らしておくための努力を怠らない
- ・過剰な暑さ、寒さ、消化器官のうっ滞、大きな心的衝撃等々であつという間に死んでしまう動物であることを認識し注意深く観察をする

### 2) 災害時のための準備

- ・同行避難できる頭数以上は飼わないこと
- ・食餌、水の備蓄をすること
- ・頭数分キャリーを用意すること
- ・キャリーに慣らしておくこと
- ・一時預かり先を確保しておくこと

■ 転載 ■ 動物との共生を考える連絡会 「飼養動物管理ガイドライン」